
我が家の愛犬が死んだ。 - 火葬の後に -

朝倉岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家の愛犬が死んだ。 - 火葬の後に -

【Nコード】

N4704BA

【作者名】

朝倉岳

【あらすじ】

1月10日。我が家のマスコットであつた愛犬が亡くなりました。家族同然に生きてきただけに、その死を受け入れるには重かったです。この作品は、家族の死を前にして、私が泣きながら書いた日記帳のようなものが内容となっています。あなたは受け入れられますか？家族に対してやり残したことはありませんか？

（前書き）

我が家の愛犬が1月10日に亡くなりました。

名前はムサシ。雑種犬で、年齢は十五歳でした。

ペットといえど、その存在は家族と同じぐらい大きなもので、

私が初めて「家族を亡くす」という事実に触れることとなってしまいました。

「生前に色々やっておけば良かった……」

その後悔は、死を目の前にして初めて実感しました。

生前の家族のことを泣きながら書いたのがこの作品です。

日記帳みたいで見づらいところもございますが、

もし読んでくださる方がいるなら、

もう一度、家族のことを考えてみてください。

- 1月9日。異変。

執筆日：1月9日。（午前9時。ムサシはまだ歩き回っている）

泣きながら書き物をやるのはいつ以来だろう。

でも書かざるおえない時が来てしまった。

いまさらになって書くことがどれだけバカらしいかは自分でも分かるし、

それがどれだけ悲しいことも分かっている。

我が家の愛犬であり家族でありマスコットでもある、

ムサシの様子がおかしくなったのは昨日のことだった。

十五歳の雑種犬である。

生憎（今思えば悔やまれる）、

昨日は友人と遊びにでかけておりムサシに気をかけることができなかった私だが、

母の話によると、昨日からどうも食欲が無く、散歩も手ごたえがない感じだったという。

その話を聞いたのが遅すぎる深夜十二時半のことだった。

暗い外を見てみると、まず異変に気づく。

たどたどしい足つきで、庭をグルグルと回っているのである。

頭は地面の匂いを嗅ぐかのように低く保ち、前傾姿勢のような形で歩く。

あきらかに体勢がおかしい。

確かに散歩のときは、好きな匂いがあればそこから十分以上も離

れないこともあったが、

それとは明らかに様子が違う。

何かに取り付かれたかのようにゆったりと徘徊しているのである。そもそも、深夜なら老犬であるムサシならとつくに寝ている時間でもあったし、

ともかく何かが起こったことを私は肌で感じ取っていた。

ホームページを検索すると、痴呆犬や脳腫瘍などのキーワードが出てきた。

少しでもポジティブになれたのは、右回りの旋回は痴呆犬に多く、左回りは脳腫瘍の疑いがあるということ、

ムサシは幸いにも右回りだったからだ。

それでも、あの元気な姿とはほど遠い。

年齢で言えばおじいさんとは言え、

この前まで元気に走り回ってたやつが

急におじいさんの動きになるなんて耐えがたいことだった。

うるさくて、元気が良くて、やたら物を食いたがる姿に戻って欲しいという

人間のわがママが支配した。

私は、

「老犬だから、いつ死んでもおかしくない」ということを最近になつて軽口で言っていたものの、

流石に受け止めきれなくなっていた。覚悟できてるつもりでも、やっぱり覚悟なんてできてなかったのだろうか。

余談になるが、近所にある竹馬の友の家の犬は、脳梗塞の状態から復活し、走れるぐらいに回復しているという話を思い出した。

2時半まで様子を見た後、

「朝になれば変わるかもしれない」という思いを胸に抱いて寝た。

人間とは単純なのか、それともよくできているのか知らないが、その日に私が見た夢はムサシが庭でハッキリと元気な顔を見せた夢だった。

人間って身勝手でズルい。

- 1月10。確信。

翌日（1月10日）

夢のせいで気分は悪かった、というか悲しい気持ちに拍車がかかっていた。

もうムサシがどうなっても私は泣くな、と思った。

それが嬉し泣きか、それとも悲し泣きかは分からなかったけど。

朝の七時に起きて一縷の望みを託して外を見ても、ムサシの様子は変わってなかった。

まだグルグルと旋回して歩いているだけだった。

そして、何が私の気がかりだったかといえば何も食べたり飲んだりしていないこと、

毛ヅヤが失せてボサボサとした手触りになったこと。

そして、昨日は右旋回だったにも関わらず、

今日になって左旋回になっていたことだった。

インターネットでは、脳腫瘍や痴呆犬は、結構力弱い声で鳴くと書いてあったのだが、

ムサシが泣き声を上げない分だけ寂しくも感じられた。

私はすぐに手持ちのハンディでヨタヨタと歩くムサシの姿をカメラに収めた。

せめて元気なときに撮影してやればよかったとも思うが、もはや後の祭りである。

震災のときもそうだが、カメラに収めておけば、と後悔した。

人間の記憶なんていつか風化するし、人に批判されようと撮影をするべきだった。

それは震災の爪あとを面白おかしく撮影するんじゃない、自らが鮮明に思い出せるように。

そしてそれが死者への弔いでもあることに気づいたからである。

少し話しがそれたが、ムサシがまだ歩いて良かったという気持ちと、

せめてもう徐々に体調が崩れていればまだ元気な姿が撮影できたのに……

という矛盾した考えを持ったままカメラを回していた。

しかし、私のことが微かに分かるのか、私が庭へ出ると私のほうを見た。

そして、確かにこっちへと歩き出そうとしていた。

しかし、足はおぼつかず、結局旋回運動に戻ってしまった。

何が悲しいかというと、私という存在を認識してくれただけで、

私は嬉しいという感覚を持ってしまったことだった。

私と母、家族は何となく分かっていた。多分、ムサシは助からないだろう、ということに。

母は「かわいそう、かわいそう」と言って涙目だった。私も涙目だった。

これを書いている最中（9時42分）にムサシが抑揚の無い声で鳴いた。

最後の力を振り絞って地面に倒れたらしい。まだ息はあるので、小屋に寝かせた。

今後どうなるか分からない。

けどこんな時くらい、コイツのことをしっかり思い出そう。

細かいところは間違えているかもしれないけど、とにかく思い出せるところだけ書こう。

震災で仲間が死んだとき、私が一番の弔いになると思ったのは、思い出すること。

そして、忘れずにその時の会話をすることが弔いになると思っているからだ。

罪なのは忘れること。そして、無かったことにすること。

ムサシという犬

ムサシが我が家に来たのは私が小学4年のときぐらいだったと思う。

私の兄が「犬を飼いたい」と言い出したのがキツカケで、幸いにも我が家にはそこそこ広い庭があったし、犬を飼う条件はそろっていた。

何件か動物ショップを回った記憶があるが、結局知人が誰かの家の犬を引き取るという形で格好がついた。

その家には犬が何匹かいて「うちの犬の二匹いるうちの一匹を引き取ってくれ」、

ということで兄と弟（つまり私）で好きなほうを協議することになった。

現在我が家のマスコットとなった愛犬を選んだのが兄で、私はもうすこし年老いた犬の方を選んだので意見が分かれたが、当時まだ小さかった子犬のかわいさに最終的にはやられて収まりがついた。

その後、車で家まで帰る最中に何が困ったかということ、名前である。

母、兄、私で意見を出したがまとまらず、途方にくれていた。

そんなとき、車内でちょうど空前のブームであったポケモンの話を兄としていて、

分かる人には分かると思うがロケット団のムサシというキャラクターの名前を聞いて、

母が「それが良い!」ということで折り合いがついた。

それがムサシという犬が誕生した瞬間だった。

家に帰って庭に放してみたものの最初はうるさかった。

まず知らない家族とともにするのにムサシは、まだ抵抗があったからだろう。

ムサシは明らかに落ち着かない様子でクーンクーンと鳴いていた。

その次は、首輪。

前の家では首輪をつけておらず、いざ我が家でつけてみると明らかに嫌な反応を示され、

これまた庭で鳴いていたのも覚えている。

しかし、それを過ぎればムサシはうちの家族としてすっかり定着した。

知らない人が玄関に来ればワンワン吠える番犬つぷりと、

それでいて普段はそれなりに静かという今思えば優秀な犬だった。多分だが、アイツは自分の役割がこれだと思っていたのかもしれない。

ワンワン言うのがうるさい、と思った時期もあったが、

アイツはアイツなりの仕事をこなそうとしていたのかもしれない。

そんなこんなで体も成長し、私が小学校を卒業する頃には立派な犬になっていたような気がする。

基本的には母や父が散歩に連れていっていたが、

ようやく慣れてきた私もようやく一人でムサシと散歩に行けるようになったし、

餌なんかも与えるようになっていた。

中学時代には、ムサシの筋肉もすごかったし、散歩では私を引っ張るぐらいのパワーを持った犬だった。

今思えばあのあたりが元気というピークに差し掛かっていたのかもしれない。

そして、現在私が大学を卒業する頃になるのだが、あまり特別だったイベントは無かったように思える。

アイツがしたことは私が学校へ行くとき見送ること、

そして私が家に帰ってきたときに一番に迎えてくれること。

しかし、私は、それを悲しいとは思わない。

それだけ家族の生活の中に自然調和した結果だと思っし、みんな違和感なく生活できていた。

何となく家族の精神的支柱にある存在、ペットってそれでいいんじゃないのかな。

当の本人がどう思っているかは知らないけど。

でも、きっとアイツも同じ気持ちなんじゃないのかな。

学校から家に帰れば、一番最初に顔を見せるのは決まってアイツだった。

もし言葉を話せるなら聴いてみたかった。

「お前はこれで幸せなのか。満足しているのか」って。

時間は現在、午前10時半。

どうなるのだろうか。

- 1月10日、その後。生命のマラソン。

1月9日（日誌の続き）

午前10時40分。

ふと、小屋で横たわっていたムサシが立ち上がった。

陽が入ってきたからだろうか。一瞬だが元気な姿を見せた後、また旋回運動を始めた。

朝よりも足取りが軽く、明らかに回復している……とまではいかないが、

ともかくまだ歩くだけの元気はあるらしい。

そういえば夜中ずっとグルグル回っていたのなら、体力的に朝で限界だったのだろう。

さっき横に倒れてから回復したのか。

午前11時40分

また倒れた。

本当に足がおぼつかないらしく、細かい段差ですら登れなくなっている。

旋回運動で繋いだチェーンが絡まったのを直そうとしたら、後ろで倒れた。

小屋に移動させ、毛布をかけて横にした。息はしているが、時間の問題のような気もする。

もし人間だったら「死ぬな、頑張れ」って声をかけたかもしれない。

けど、それでもアイツは歩いていた。
痛々しく。それを見れば分かる。

アイツは頑張ってる。頑張って歩いてる。
だから、頑張れなんて声かけられないし、死ぬな、なんとも言えない。

私が言う資格なんてどこにもないんだって。
泣いている母に「仕方ない、仕方ない」ってずっと私は言ってるけど、

何が仕方ないのか自分でも分からなかったりする。
歳が？病気が？運命が？ 何が仕方ないのか。
分からない。

午後5時

アイツはまだ頑張っている。

一時間歩いては倒れ、また一時間寝ては歩くを繰り返して今まで繰り返している。

しかし、明らかに時間が経てば経つほどに足元がおぼつかなくなっている。

正直、すさまじい生命力だと感心もしているが、本当に時間の問題であることも認識している。

人間で例えるなら、朝から何も食べずにマラソンし続けているようなものだ。

給水も食事もとらないまま、生命のガソリンが続く限りアイツは歩き続けるだろう。

何がアイツをそうさせるのだろうか。フラフラの足を動かし続けるのは何なんだろう。

午後7時

夜になると、ムサシは小屋で寝たままになっていた。

再び歩く気力を溜めてるのだろうか。息はまだ続いている。

こんなこと言うのもなんだが、もうアイツは良くやったと思う。正直、朝に倒れた時点で私はもうダメだと思っていた。それから半日以上。アイツは生き続けた。だから、もういい。家族もそう思い始めていた。もういい。ここまで生きてる時間を延ばせただけでいい。だから、せめて安らかに眠ってくれ、と。

午後１１時１５分。

母が小屋を見たところ、ムサシは息をしていないらしい。いつから息をしていなかったのかは分からないが、とにかく息は止まっているらしい。

死んだのだろうかそれも分からない。

何となくそれを見るのが嫌なので、今こうやって書き物なんかをしている。

今、ここで死んだ、死んだと騒いでも何も変わらない。

そんな朝の時点で私は覚悟できていたから。

ここでも私の口から出るのは「仕方ない」ばかりだった。

多分・・・明日の朝、確認した後、ペット用の葬儀関係者に連絡を入れることになるだろう。多分。

午後１２時。

私は、結局ムサシの小屋を訪れていた。寝れなかったからだ。ムサシの口はだらしなく曲がり、目元には涙の痕が残っていた。間違いなかった。

- 1月11日。火葬。

1月10日。

午前は、学校があつたので早く家を出た。
もちろん、そんな気分でも無かつたのだが。

ペット葬儀場が混んでいたら、明日以降になるかもしれないという
話があつたのだが、

俺が帰ってきたときには庭のチェーンも外され、
小屋も毛布などがすっかりと無くなっていた。

薄々気づいていたが、愛犬は骨になっていた。
白い壺に入つたまま。

頭蓋骨らしきものがドンとそこにあつた。
怖くは無かつた。

ただの亡骸としか感じなかった。

両親に話を聞くと、午前中にそれらを全て行つたらしい。

「15歳という年齢の割には、丈夫な骨でした」
と葬儀担当者が言っていたらしい。

そりゃそうだ。アイツは体力の続く限り頑張つた。
むしろ、俺はアイツの体力に驚いた。

少なくとも俺が諦めた時間より10時間以上は生きていたのだから。

墓は、庭の隅に作られることになった。

そして、犬はもう飼わないということを母に告げられた。けど、ガランとなった庭は、あまりに寂しかった。当たり前前の存在が、当たり前前に存在することはとても重要である。そんなことはずっと前から理解してたつもりだったけど。けど受け入れるには少し重すぎるようにも思える。

だから、もう死ぬな。

誰も死ぬな。誰一人として死ぬな。

悪人だろうが善人だろうが、恨まれてようが、他人だろうがそんなことはどうでもいい。

だから、もう誰一人として死ぬな。それが犬だろうが人間だろうが関係ない。

生きれるところまで生きろ。

死ぬな。頑張れ。

きっと、誰かが悲しむ。

悲しむ存在がいる。

そして、死んでからじゃないと気づけない。

死ぬな。

死んでいい存在なんて本当は無い。

普段、死んでくれと思う人だって、いざ死ねば誰かが悲しむ。それを忘れない。

だから死ぬと決まっけていても死ぬな。

死ぬまで生きてくれ。

我が愛犬のように。火葬の後。

- 1月11日。火葬。（後書き）

最後まで、拙い日記のようなものを読んで下さってありがとうございました。

私も3・11の震災にて仲間を失いましたが、

弔うことは、口に出すこと。口に出してあげること。

罪なことは、忘れることだと今も思っています。

もし、その時にその人のことを話せる内容、もしくは思い出せる物、みなさん、持っていますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4704ba/>

我が家の愛犬が死んだ。 - 火葬の後に -

2012年1月12日22時00分発行